

アフリカ・カメルーン農村社会における障害者と社会の関わり

平成 18 年度入学
派遣先国：カメルーン共和国
戸田 美佳子

キーワード：カメルーン東南部、障害観、開発

対象とする問題の概要

身体的・精神的障害に関する研究は、障害を正常な状態からの逸脱として捉える「医療モデル」から、社会集団・環境を考慮に入れた「社会モデル」へと転換しつつある。この発想は、先進諸国のみならず、アフリカ諸国においても都市を中心とした NGO 組織の障害者の開発援助にも反映されつつある。

しかし、カメルーンにおける障害者支援は、これまで慈善団体が行う施設でのリハビリテーションを中心であった。障害とは、あくまで個人的な問題とされ、社会的文脈は含まれていない。2006 年からは、カメルーン政府による障害者を把握するための本格的な調査が行われ、障害者の社会進出を目指し職業の斡旋も始められている。だが、この流れも都市部から離れた村落コミュニティでは、情報も乏しく、障害の開発には地域差がみられる。また、村落コミュニティ内で、障害者がどのように生活しているのか、障害者と非障害者であることの意味が何であるかはわかっていない。



図 1. カメルーン東南部：農耕民の村

研究目的

人類学的視点からアフリカ諸社会の障害観を問う研究は未だに広くは行われていない。本研究ではカメルーン農村社会におけるフィールドワークで、生活の場における障害者を含んだ人々の相互的関わりを見ることによって、アフリカにおける障害とその社会の中での扱われ方を調査する。そこから、“健常者”と“健常から逸脱した障害者”という二項対立的発想をもちつつも“平等を望ましい”とする西洋の障害観とは異なる新たな視点を見出すことをめざす。

また、都市部を中心に、カメルーンにおける障害者支援についての調査もおこない、障害と開発に関する知見を得たいと考える。

そして、最後に社会の中で障害がなぜ生まれるのかを問い直すことを大きな目標としたい。

フィールドワークから得られた知見について

今回、主調査地としてカメルーン東部州M村を選定した。同村には、農耕民の身体障害者、狩猟採集民の視覚障害者、隣村には狩猟採集民の言語障害者があり、徒歩圏内には数人の障害者が他にもいる。この地域では、熱帯特有の焼畑（図2）を営む農耕民と狩猟採集民が、主従関係の対立を持ちながら相互的關係を維持し各々別の集団生活をしている。農耕民は自らの畑を所有しているが、狩猟採集民は畑を所有せず農耕民に雇われる者が多い（図3）。村落コミュニティの障害者の生活を、同村の農耕民の身体障害者と狩猟採集民の視覚障害者を例に紹介する。

狩猟採集民は、労働の有無に関わらず均等な食料分配が行われる。平等が保たれる狩猟採集民コミュニティ内で、障害があることが特別な意味を持つことはあまりない。視覚障害者である彼が、森に入ることの当然のことと見なしている。一方、障害をもつ彼は、森にいない日の大半を、仕事を貰いに農耕民のカルティエ内を点々として過ごしている。その内容は、キャッサバ製粉や草刈など農耕民の女子供の勤めであり、農耕民がわざわざ仕事を与えているように見える。（図4）

農耕民の身体障害者と生活はというと、洋裁で得たお金で狩猟採集民を雇い農業をしている。（図5）収穫や開墾の時期のみに雇う農耕民とは違い、毎日彼の家には狩猟採集民が訪れたまり場となっている。

この地域において、農耕民であるか狩猟採集民であるかが生活をする上での第一要因といえよう。障害があることで、この雇用に基づく主従関係が崩れることはない。しかし、大事なことは、農耕民と狩猟採集民の対立する村落コミュニティの中で、障害をもつ彼らが相対するはずの相手と新たな関係を築いていることではないだろうか。

村落コミュニティの中での障害観は必ずしも平等が望ましいとする西洋的な障害観とは違う。障害が社会と障害者の関係性の問題だとするならば、アフリカではコミュニティが重なり合い社会が成り立っている。障害に注目することで、コミュニティの境界に位置する人々の動き、コミュニティの持つ意味が違って見えるのではないだろうか。



図2. キャッサバ畑の火入れ

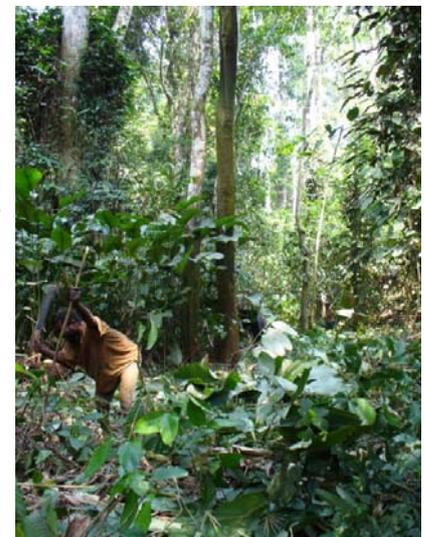


図3. 開墾：日雇い狩猟採集民

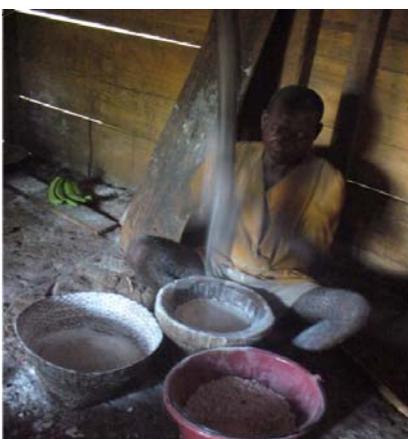


図4. 視覚障害者：キャッサバ製粉



図5. 身体障害者：服作り

今後の展開・反省点

カメルーンでは古くからフランスやイタリア、カナダなどの慈善団体が、障害者支援を行っている。彼らは国内に点在するミッションの働きかけにより、村落コミュニティ内の障害児を都市部の施設まで連れてきている。数年のリハビリテーションを終え、帰村した者が、カメルーン東南部のフィールドにも多く見られた。彼らは、実際に 1000 km 以上も離れた施設から戻ってきている。

しかし今回の調査では、障害者施設での生活を充分には観察できなかった。そこで次回は、都市部の障害者施設を中心に、ケアを求める障害者の移動の流れを見ていきたいと思う。個人に対する医療的支援を行う施設での暮らしが、村落コミュニティ内で生きる障害者にどのように影響するのであろうか。今回、観察してきた村落コミュニティ内の障害者からの視点も交えて、次回は都市部まで広げた調査を行いたいと思う。